日永つんつくおどり

２０２０年の発祥４００年祭を前に、今年も四日市市指定無形民俗文化財の「日永つんつくおどり」が開催されました。この伝統文化は、かつて川幅が狭く大雨に弱かった四日市を流れる天白川の堤防を築く、地固めのために村人が参加した時の踊りが始まりと言われています。

この郷土の伝統的なまつりを、近隣の高校生たちが盛り上げています。始まる前に、リーダーの先生を中心に円陣を組む姿は頼もしい限りです。

日永小学校では、児童につんつく踊りを教えていますが、今回参加の１００人近い高校生も、当日までに踊りをマスターして、踊りの列に参加しました。大きな声で場を盛り上げる素晴らしい力を持った高校生たちでした。

この「つんつくおどり」にも井上さんと共に活動する高校生が企画して、出展しています。

日永つんつくおどり保存会、木村さんにお聞きしました。

たくさんの高校生が一緒に踊り、出展していることを、どのように感じていますか。

「若い高校生たちが入ってくれると地域が盛り上がります。地域の保存会や、お世話をして下さる方が高齢化していますので、若い力が入ってくれると、自分たちも若がえりますし、気持ちが華やいでとても楽しいです。」

総おどりでは、近くに住む人々、衣装も工夫しての参加、つんつく踊り保存会のみなさん、そして高校生が混じり、何重もの輪を作って踊りました。

高校生が、住んでいるだけの場所から、活動する場へと思いを広げ、地域に息衝く人々の生活や慣習から学ぶ機会や伝統行事に打ち解けて参加していく仕掛人が井上さんなのです。

40～50年ほど前までは町内の各地で盆踊りが行われており、浴衣さえ持っていけば、毎日どこかの踊りに参加できました。祭りや盆踊りは楽しみであり、地域の人と顔と顔を合わせる大事な場所だったと言えます。